

本科 2 期 12 月度

解答

Z会東大進学教室

早大国語



【問題】(演習)

出典：小林康夫「身体と空間」／早稲田大学・法学部・98年

文章略解

人々は写真に写された出来事を語るが、写真 자체を語ることはない。写真は物語から疎外された孤独な存在である。生きるということは時間に沿った運動であるが、写真はその時の流れを截断することを本質とする。そうした意味で写真は、非人間的な行為をなしうる。われわれは、その写真の性質を充分認識した上で、自らの日常的な眼差しが解体される危険を冒しても、写真の残酷な眼差しを学び、みずみずしい光に触れるべきである。

解答

- 問1 イ 問2 ヌ 問3 ヨ 問4 ツ
問5 牛 問6 オ 問7 テ 問8 キ

【問題】(自習)

出典・市村弘正『増補「名づけ」の精神史』／上智大学・法学部・法律学科・98年

文章略解

ロベール・ブレッソン監督の映画『抵抗』は、レジスタンス運動で逮捕された主人公フォンテーヌが脱獄するという話である。この中では主人公の手の表情の豊かな描写が印象的であるが、それ以上にそこに象徴された事物と人間との相互交渉に目を向けるべきである。人間の意志で事物にとことんつき合うことで、社会的に割り付けられていた機能を「使用価値」に即して変えていくことなどを、ブレッソンは映画の中で表現しているのだ。

解答

問1 d

問2 ア＝A イ＝B ウ＝B エ＝A

問3 ア＝A イ＝B ウ＝B エ＝B

問4 a 問5 b

問6 ア＝A イ＝B ウ＝B エ＝B
オ＝A カ＝A キ＝A

問1 傍線部分に統いて、ここで言う「手がもつ表情の豊かさ」についての説明がなされている。この段落と次の段落（17行目まで）

の記述を追つていくことで選択肢を絞り込む視点が得られる。

傍線部分の直後では「手錠に抗う手」「壁を叩き懸命に隣房に合図する手」から「自らの脱獄の方法を仲間たちに伝えようと小さな紙切れに書きとめる手」に至る、脱獄のためのさまざまな手の動きが具体的に述べられている。それを受けて次の段落では「手の表情の豊かさとは……この痕跡が帯びる多彩な表情によるものなのであった」（16～17行目）とされている。この①「脱獄のための手の動き」・②「痕跡」の二点を押さえた選択肢……というふうに見ていくと、選択肢群の中ではdがベストとわかる。他の選択肢はいずれもこの②を含んでいない点でdには劣る。aではどのような事情で「抑制」されているのかが具体的でない。bもaと同様に「脱獄」という具体的な状況が述べられていない。cは近いが、「痕跡」に言及していない点でやはりdには劣る。

問2 傍線部分の「そのこと」とは、直前に述べられた「ファンティースの抑制された動き」の「表情の多様さ」である。それは後に「しげさや身振りが本来的にもつ多様さや多義性」（20～21行目）と言い換えられている。そしてそれへの期待はつづく「しかしそれは……」以下の記述で否定されている。この部分の記述を追つていくことで「入れあげてはならない」ことの意味が具体的に見えてくる。ここでは「肝要なのは、ファンティースの手の痕跡なのである」（24～25行目）とされている。要するに「しげさや身振り」以上に「痕跡」が重要なのだ、と筆者（市村）は言っているのである。この点でアはA。しかしながら、他の選択肢を吟味していくにはその「痕跡」の意味を追つていかねばなるまい。

つづく段落の記述にはこの「痕跡」とは、「全身体的な働きかけによって、手のあとをつけられた壁や扉」（26～27行目）であるとされている。その「全身体的な働きかけ」とは後にさらに具体的に「事物が帯びる人間を突き放す物質的抵抗性と、とことん付き合った」（31行目）こと・「事物との本来的な相互交渉」（32行目）であるとされている。ここまで見てくれれば工もAであることがわかる。イは、「全身体的なしげさ」という言い方が不適切。「しげさ」以上に「全身体的な働きかけ」が重要だ、と筆者は言つてるのである。ウの「社会の管理体制」云々もここでは的外れ。

問3 この傍線部分に言う「事物との本来的な相互交渉」とは、前に説明されているとおり、「かれの脱出への意志がそれらの物を本

來の事物として立ち現われさせた」（28行目）ということを指す。その具体例として、後に「スプーンを武器に変じさせた」ことが挙げられている。この点に具体的にあてはまる選択肢はオ。アも「本来の事物」＝「そのもののあるがままの姿」と捉えれば合致していると読める。しかしながらイのように「思いもかけぬ創意」と一般化してしまった部分の叙述の具体性から外れてくれる。ウもイと同様に一般化しそうであるし、また「自由に変えられる」というのも言い過ぎ。そう読んでもるとエの「多義的なものに変えてゆく」というのも的外れだとわかる。ここでは「スプーン」を「武器」に転化させただけであり、それ以外の多義的な役割はないのである。

問4 前問の延長線上で考えていく。この傍線部分に言う「人間との精神的な交流」とは、「物」が「物質性という自然的属性」を脱して得るものである。つまり、ある物質が、人間の精神と本来的に相互交渉をもつことによって、新たな意味を帯びるということをこの傍線部分では述べているのである。その点を押さえてから選択肢群を見ていく。

「人間」と「物」との交渉ということをきちんと踏まえた選択肢はa。bは「交渉」ではなく「表現」の問題になってしまっている。dも同様に「手法」として述べている点で不適切。人と物との直接的な交渉という観点からは外れている。cは近いが、「抵抗」するだけではなく「新しさ」（新たな価値）を見出すというところまで踏み込んでいない点でaには劣る。

問5 傍線部分の直前に「フオンテーヌの独房と対蹠的に」とあるところから、この傍線部分は、「フオンテーヌの独房」にある性質を失った状態を指していると考えられる。ここまで見てきたとおり、「フオンテーヌ」は独房の中で「事物が帶びる人間を突き放す物質的抵抗性と、とことん付き合つた」（31行目）のである。これを裏返して考えれば、傍線部分に言う「特性」とはたとえば「事物が帶びる人間を突き放す物質的抵抗性」ということになるのではないか。それをきちんと踏まえた選択肢はb。aやdのように「物質的空間」というのでは不充分で、そもそも「物」がもつている「物質としての性質」なのである。cの「価値」云々は全く的外れ。

問6 一つ一つの選択肢を問題文と照合していくことで解答を導いていく。ここでは、特に第四段落（18行目）の内容をきちんと押さえるか否かで選択肢の選びやすさが変わってくるようだ。ここで筆者（市村）は、「フオンテーヌの抑制された動き」を「社会の

管理体制」に結びつけて捉える見方に否定的である（問2の解説も参照のこと）。そしてそれは「チャップリンを尊敬はしても、その身振りで表現した映画には批判的である」（21～22行目）ということにつながつてくる。このように読んでくると、イがBであり、カとキがAであるという判断ができるよう。

ここまで見てきたように、筆者は、ブレッソンの映画『抵抗』を、「身振り」「しぶき」に注目するのではなく、むしろ「人間と物質との相互交渉」の方が重要だ、と捉えている。それを「全身体的な意志的行為」と捉えたアの選択肢はこの点で適切であろう。しかしながら「独房」自体が多彩なわけではないからウはB。エは「顔」としている点が誤り。表情豊かなのは「手」である。オは第二・第三段落の内容に合致している。

●
×
毛
●

【問題】（演習）

出典：『宇治拾遺物語』「卷三 十九・一条摂政・歌の事」／立教大学 法学部 91年

現代語訳

今（となつて）は昔（のことだが）、一条摂政と（申しあげた藤原伊尹さま）は、東三条殿（と呼ばれた藤原兼家さま）の兄君でおいであそばす。お顔立ちをはじめとして、心づかいなど（すべて）御立派で、学識やふるまいもしっかりした方でおいであそばして、また一方では好色めいていて、女性とも多数お逢いになり（その多くの女性と浮名を流して）、まことに楽しく御交際あそばしたが、（御自身でもそれを）少し軽率だとお感じあそばしたので、実名をお匿しあそばして、大蔵の丞豊蔵と（仮名を）名のつて、身分の高くないう女のもとには、お手紙なども（その仮名で）お出しになった。（このようにして女性に）思いをおかけあそばして、お逢いあそばしたりもしたのだが、（当時の）人々は皆そのように（豊蔵は、実は伊尹さまであると）わかつていて、（伊尹さまが仮名で女遊びをなさることを）存じ上げていた。（ある時、伊尹さまは）身分の高く、立派な方の姫君のもとへお通い始めあそばした。（その姫君の）乳母や、母などを味方につけて、（一方では姫君の）父親には（自分が姫君のもとに通つてることを）お知らせあそばさない（で通つていらつしやる）うちに、（娘のもとに伊尹さまが通つているという噂を父親が）耳に入れて、（実名ならともかく、身分の低い女性のところへ通う際の仮名で通つてくるとは、なめられたものだと）たいそう腹を立てて、母親（である自分の妻）を責め立てて、非難をし、厳しくおつしやつたので、（母親は）そのような事実はない（夫と）言い争つて、（伊尹さまに）「まだ（娘とは逢つたことはない）という内容の手紙を書いてお送りください」と、母君が弱りきつて申し上げたので、（伊尹さまは）

人知れず……人に知られず（ひそかに逢いたいと、我が）身は急いでいるのに、長い年月を経ても、どうして越えることができないのだろうか、逢坂の関を「（私は早く姫君に逢いたいと思っているが、障害に阻まれて、どうしても逢うことはできないのだ）という歌を書いてお出しになつたところ、（それを母が）父に見せると、（父は）それでは（娘に漁色家の伊尹さまが通つてているという

噂は）嘘だったのだなと思つて、返歌を、父が、（娘である姫君に代わつて）した（その歌は次のとおり）。

あづま路に……（京に住んでいて）東国地方に往来する人ではない（あなたの）身では、いつ越えることがありましょうか、逢坂の闕を「＝身分をかくして好色な振舞いをなさる方だとわかっている以上、単なる女遊びにおつきあいをする気はありませんよ」と詠んだ（返歌）を見て、（伊尹さまは）微笑みなさつたことであろうねと、（一条摂政）御集に書いてある。おもしろく（思われます）。

解答

問1 ①＝女のもとに（女のもとへ）〔5字・解答例〕

②＝女性に思いをおかけになつて〔13字・解答例〕

③＝味方につけて〔6字・解答例〕

問2 (1)＝(ア) (2)＝(カ) (3)＝(ア) (4)＝(ア)

問3 (a)＝助動詞・連用形 (c)＝動詞・命令形

豊蔭が伊尹であること〔10字・解答例〕／ 豊蔭が偽（仮）名であること〔10字・別解例〕

問5 姫君と伊尹が契りを結ぶこと〔13字・解答例〕

問6 初め＝やんご〔4行目〕 終わり＝けり。〔5行目〕

問7 いつ越えることがあるでしょうか、いいえ、いつまでも越えることはありません〔解答例〕

いつまでも越えることはありません〔別解例〕

問8 (ア)＝2 (イ)＝1 (ウ)＝1 (エ)＝2 (オ)＝1

【問題】（自習）

出典：『保元物語』「中巻 新院御出家の事」の全文 / 関西学院大学 文学部 92年

現代語訳

新院（崇徳上皇）は（比叡）山中にお逃げあそばしたが、日が、次第に暮れ（てき）たので、夜陰に紛れて家弘・光弘父子が、交替で肩にお寄りからせ申し上げて、這這の体^{ほうほう}で山を出たのだった。法勝寺のあたりで輿をさがし出して（新院を）お乗せ申し上げ、「どこ（のお屋敷）へお入りあそばすおつもりでしようか」と（家弘・光弘父子が）申すと、「阿波の局のところへ（行こう）」と（新院から）仰せがあつたので、二条大宮へお連れ申し上げてたずねたところ、門を閉じ（てあつ）て、（その門を）叩いても叩いても（門の内側からは何の）音沙汰もない。「それでは左京大夫のところへ（行こう）」と（新院が）おっしゃるので、そこへお供申し上げたが、「（主人は）今朝の戦いの場から、どちらへおいでのになつたのでしょうか、判りません」と（言つ）て、（やはり家の者が）門を開けない。「それで少将の内侍のところへ（行つてみよう）」と（新院からの）仰せがあつたが、そこにもだれもいなかつたのだった。昔は、天下の安定も不安定も目前に見るようにならかであり、全国の治まるも乱れるも天子の思し召しのとおりであります（ものだが）、今はまた、五畿七道、東西南北（といつた国のどこもかしこも）乱れて、都の宮中では、ほんのしばらくのあいだお立ち寄りあそぶことのできる行在所もおありあそばざないのだから、（新院は）どんなにか昔が恋しく思つておいであそぶことだらうかと（思うと）しみじみとおいたわしい。

家弘父子も、かつぎ慣れてもいない御輿を、（院の側近という身分でありながら）自分たち自身でおかつぎ申し上げ、あちらこちらへと（新院に）お供申し上げたので、疲れ果てて、（もう体が）動けそうにも思えない。合戦では戦い疲れてしまい、鎧や兜の重さにはへこたれた。身体の状態は自分でも自分のような気がしない（ほど疲れ果ててしまつていた）ので、（いつそのこと）自害したいと思うことが度々だつたのだが、そうして（自分たちが自害してしまつたら）新院のその後を誰が見届け申し上げられようか（いや、たつたお一人で敵の手におかけ申し上げることはできない）と思ったので、よろめきながらお供をする。新院も合戦にとり紛れていたので、お食事も召し上がらないで、昨日も暮れてしまつたし、今夜も（もうすぐ）明けようとしている。御身もお弱りあそばして、（意識も）消え入る心地にお感じあそばすばかりであつた。

いつまでもそうしているわけにもいかないので、知足院のあたりで、（たまたま）また僧坊のあったところに（新院を）お入れ申し上げたところ、（新院は）そのままばつたりと倒れておしまいあそばす。家弘はあれこれ苦労して、重湯を何とか作ることができて（新院に）差し上げたところ、（新院は）少々召し上がった。その後、秘かに僧を一人お呼びになり、（新院はとうとう）御髪をお下ろしあそばす。光弘も即座にもとどりを切つて（出家して）しまったのだった。家弘も出家しようとしたのを、「（私の巻き添えで）お前（まで）が出家してはますます（私の）罪が深いと思わずにはいられないのだ」と仰せがあつたので、（家弘だけは）しばらくはもとどりを切らなかつたのだった。「これからどちらへおいであそばしますでしようか」と（家弘親子が）申すと、「こうなつたら、仁和寺の五の宮（のところ）へ行くしかない。ただし、取次ぎを申し入れてはならない。無理にも入つてしまえ」と（新院が）おつしやるので、（仁和寺までたどりつくやいなや）さつと中へ（御輿を）かつぎ入れ申し上げて、（まだ出家していない）家弘は北山へ逃げ込んでしまつたのだった。五の宮は、（父である）故院「（鳥羽院）」の御供養のためと、鳥羽の御殿へ入つていらつしゃつた間に（新院が）おいであそばしたので、急いで（使いのものが）御報告申し上げると、たいそう御動搖あそばして、「御所へ（新院を）お入れすることは、とてもできそくもない。寛遍法務の僧坊へお移し申し上げてから、内裏へ報告せよ」と（言つ）て、すぐに宮中へ御報告申し上げたところ、佐渡式部大夫重成をお呼びになつて警固し申し上げる。

解答

問1 ①||ようや（く）

②||たなごころ

③||しばら（く）

問2

(a)||ア)

(b)||エ)

(c)||ア)

問3

(d)||オ)

(e)||ア)

(f)||ウ)

問4 自分たちが自害してしまつたら

〔解答例〕

問5

いつまでも逃げ回つてばかりいるわけにはいかないので

〔解答例〕

問6

(1)||ウ)

(2)||キ)

(5)||ア)

(7)||エ)

(8)||カ)

問7 5
問8 (イ)

問1 傍線部①・③の「漸く」と「暫く」は字形が似ており、訓読みすると送り仮名も同じになるのでよく出題される。「漸次（ぜんじ）」と「暫時（ざんじ）」も、形だけでなく音も紛らわしいので注意する。

傍線部②の「掌」は現代語では「てのひら」と読むこともあるが、古文では「たなびきろ」となる。「手の心」からきた言葉であろうと考えられている。

問2 「四海」・「四境」など地理的などに關する「四」は「東西南北」の意である。「東西南北の海」は、日本が周囲を海に囲まれた国であることから、「海に囲まれた国土」を意味する。ちなみに「四時」・「四季」と時間的なことの場合、「四」は「春夏秋冬」の意味でも使われる。

問3 傍線部(d)について。一般に「物の具」は「道具類」のことを言うが、文脈・場面に即して考へる必要がある。ここでは直前に「合戦にはたかひつかれつ」とあり、この最後の「つ」は、文中にあるにもかかわらず終止形の単独用法（あとに付属語の接続しない用法）であることから、完了の助動詞の《並列》の用法である。したがって、「物の具にはおされ」ている人は武士であることが判り、疲れをいや増すものとして鎧兜の重さのことを言つてゐるものと理解する。

傍線部(e)について。「供御」は「くご」または「ぐご」と読み、天皇・上皇・法皇など高貴な人物の食事を言う。そこで、続く「参る」は飲食に關しては尊敬語で、「召し上がる」と訳すべき用法があることを思い出す。

傍線部(f)について。「御覧じ入る」は「見入る」の尊敬語だから、一般には「じっとお見つめになる」といった意味で訳すのだが、それだけならわざわざ設問にする必要はなかろう。ここでは「御覧じ入る」の対象が問題なのだが、その対象である「重湯」とはごくうすい粥のことであり、食物である。また敬語表現から主体が上皇であることもわかる。上皇はこれまであちこちと逃げ回つてきて「ひれふさせおはします」というほどに疲れているが、こんなに疲れるほどならさぞ空腹でもあつたろう。疲れすぎているときはあまり食慾もないものだが、「いささか」とあるから、「すこしだけ」なら食べられるだろう。また、疲れすぎている胃腸への負担が軽いように、粥も薄くして「重湯」にしたのだろう、と考えて、ひとつだけ飲食に關わる選択肢(w)を正解とする。なお、「御覧じ入る」は本来は見ることに關する語であるが、もつと一般的に「食ふ・飲む」の尊敬語として用いられる語に「聞こし召す」

があり、これも本来は「聞く」という知覚動作をいう語から来ている。貴人の（とくに）生理的な行為に関しては、「寝」を「大殿籠る」というなど、直接的な表現を避ける傾向が強い。

問4 「さて」は副詞「さ（そのように）」に接続助詞「て」の接合した副詞・接続詞である。現代語の「そうして」「そのまで」「そんなわけで」「それゆえ」などに相当し、現代語のような「話変わって・ところで」といった用い方は稀である。

ここでは直前にある「自害をせばやと思ふこと度々なりけれども」が最大のヒント。「さて」に含まれる指示語部分の「さ」の内容は、「自害すること」か「なんべんも自害しようと思ったこと」のどちらかである。傍線部の次にあることとの関係で、どちらかを選んで、前の段落で述べた訳し方に当てはめればよい。

そこで続く部分を見ると、「院のことを見届ける人がいなくなると思つてよろよろしながらも付いていった」とある。したがつて、ここに前に置くなら「自害しようと思つて」よりも「自害して」と直接的に自害を想定し、その結果として「自分らに代わつて院の世話ををするものがいなくなるから死ねない（と考えた）」とする方がよい。あとは設問の「後に続くよう」との指示に従つて、「自害してしまつたら」と仮定条件的に訳すことになる。また、自害の主体も補つておきたい。

問5 前の問題で扱つた「さて」を含む慣用句である。まず逐語訳を作成するために品詞分解すると、「さて（副詞）+し（強意の副助詞）+も（強意の係助詞）+ある（ヲ変動詞連体形）+べき（適当・当然・可能の助動詞連体形）+なら（断定の助動詞未然形）+ね（打消の助動詞已然形）+ば（順接確定条件の接続助詞）」となり、逐語訳は「そのまままでいるわけにもいかないので」といつたところである。「そのままにもしておけないので」くらいに縮めて、これを訳し方の基本型・骨組みとして覚えておくとよい。しかし、このようなユニバーサルな訳語を機械的に当てはめるのでは、大学入試問題の出題意図を十分に満たしているとは言ひがたい。というのは、いま作った訳語の中に「そのまま」とあり、これが指示語であることは問題文の表現のまままで、文脈における意味を考えたことを解答に示したことにならないので、解釈問題の答案としてはこのままで不適切なのである。指示内容を明示して始めて独立した答案となるわけだ。

そこでこの場面で「さ」の指し示す状況を捉えると、この前までずっと院を中心とする一行三人は都の内外を逃げ回っていたことが思い出される。従つて、「さ」は「うろうろと逃げ回つてばかりいること」と考えて、「いつまでも逃げ回つてばかりいるわけ

にはいかないので」といった内容を訳出することになるのである。

問6

傍線部(1)の「つかまつる」は謙譲語であるから、その主体は都の内外を逃げ回る一行三人のうち、敬意の対象となる人物のまわりの人物と考える。また、院の乗る輿はひとりではかつてないので、親子一人をまとめて動作主体と考える。

傍線部(2)は、「開かず」の前に「門を」とあるから、その屋敷の主を動作主体と考える。いまどこにいるかということを傍線部の前で最も近いところに探すと、「『さらば左京大夫がもとへ』とおほせければ、それへつかまつりたれども」とある。なお、現代語訳に示したようにここでは主人の留守を口実に門を開けなかつたので、正解としては「左京大夫の家人」としたいところだが、ないので次善のものを取ればよい。左京大夫が主語でも居留守を使つたと考えれば十分に意味は通る。

傍線部(5)は、「もとどり」とは「元取」・「髪」と書き、髪を束ねた「まげ」のことであるから、「もとどり切る」は出家を意味する。直前の場面でまず院が出家したことが「御髪おろしおはします」という最高敬語で判り、後を追つて「光弘」も「やがてもとどり切つて」いる。「やがて」とあるから院は光弘の出家をとどめる間もなかつたのだろうが、それを見た父の家弘まで出家しようとすると見て、自分のために一人ならず二人までも出家の道連れにしてはいけないと考えて、「汝出家してはいとど罪深きとおぼゆるぞ」と、家弘の出家を押しとどめたのである。

傍線部(7)の「わたる」は、古文では広く移動一般をいう語である。補助動詞として使われて空間的・時間的な広がりのニュアンスを上の動詞に付与することもあるが、ここは直前が助詞であるから本動詞と捉える。そこで傍線部の前後の文脈を取ると、「五の宮が亡くなつた父君の供養のために鳥羽の御殿にいらっしゃつたあいだに『動作主体』がおいでになつたので、急いでお知らせしたところ大騒ぎなさつた」となつてゐる。つまり五の宮の留守中に押し掛けた人物が答である。傍線部には最高敬語の尊敬表現を伴うことも考えて、また傍線部(6)で「是非なく（輿を）かきに入るべし」と新院が命令していることからも、動作主体は新院である。

傍線部(8)については前の問題で見た文脈でほとんど答えは出でているが、もうひとつ駄目押しをすると、騒ぎながら言つた言葉に「御所へ入れまるらせむこと、およそ叶ふまじ」とあり、御所へ入る側でなく、入れる側の人物であることが判るし、かつ、騒いだ人物そのひとにも「せ給ふ」の最高敬語が使われてゐる。御所へ入るべき人は新院なのだから、それはどうかと騒いでいる貴人といえば五の宮だということになる。なお、「御所」というのは宮中を言うこともあるが、「皇族の住居」として院や東宮などの住

まいを言うことも多い。

問7 新院はここでは追つ手から逃げ回っている身であることを念頭において、敬語表現にも注意しながら会話文を丁寧にチェックしていく。

「いづくへかゝ」と申せば（2・3行目）……謙譲語なので×

「阿波の局がもとへ」とおほせごとあれば（3行目）……尊敬語あり○

「さらば左京大夫がもとへ」とおほせければ（4行目）……尊敬語あり○

「けさの～」とて、門を開かず（5行目）……敬語なし・門を開くのは家の中の人物で×

「さらば少将の内侍がもとへ」とおほせごとありけれども（5・6行目）……尊敬語あり○

「汝出家しては～」とおほせごとありければ（18行目）……尊敬語あり○

「さていづちへかゝ」と申せば（19行目）……謙譲語なので×

「さりとては～」とおほせられければ（19行目）……尊敬語あり○

「御所へ入れまゐらせむこと～」（22行目）……問6で見たとおり五の宮のことばなので×

以上、○としたものをあわせて五ヶ所である。

なお、この問題では文中の会話にすべて引用符がつけられているが、一般には会話は自分で気をつけて引用符を振っていくものと心得られたい。場合によつては、会話文の一部にしか出題者による引用符の設置がなされていないこともあるので、十分な注意が必要である。古文の会話表現は、一般にその始まりよりも終わりが明確である。すなわち、「と・など・とて」という三つの助詞が目印になる。ここから（およそ句読点を目安に）さかのぼつて、始まりを確定する。

さらに、この手の設問は、あらかじめ、そのつもりで問題文を読み進めて時間を省きたいものであるから、その意味でも入試問題は設問の先読みが肝要である。

問8 「案内をば申すべからず。是非なくかきに入るべし」は、「取り次ぎを請うてはならない。いきなり入つていけ」といつている。つまり仁和寺の人々に自分であることを知られる前に中に入つて、自分がそこにいることを既成事実化してしまいたいわけである。

文脈を無視すれば、この裏にある心情はいくつか考えられる。たとえば、「自分がそこにいくことが先方の迷惑になることが気遣われるので、先方には罪はないということにしたい」だとか、「行く先は自分にとっては自宅も同然であるから、わざわざ面倒な手続きを踏むことはない」だとかがそうである。しかし新院は、ここに到る遍歴の間に、身を寄せようとしてあちこちを訪ね歩いたが、ことごとく迎え入れてもらえたかったという経験をしていることを見逃してはならない。これを考慮に入れると、ここでの真意は、「なまじ取り次ぎを請うて拒絶の機会を与えるわけにはいかない」というものだと判る。そこで、先方の仁和寺に対して好意的なものや、自分の側の優位性（言うことを聞かせられるという自信）の表現された選択肢はいずれも不適であることになる。したがつて、選択肢(ア)・(ウ)・(エ)が消える。

選択肢(イ)と(オ)については、「一抹の」「幽かな」はここではほとんど同じことだから、結局「不安感」か「虚無感」かの違いということになるが、「虚無感」では絶望的になつていてことになり、「是非なく」という強い決意との整合性がない。したがつて、残る選択肢(イ)が正解。

●
×
毛
●

【問題】（演習）

出典：『源氏物語』／立教大学 文学部 00年

現代語訳

晩秋の悲哀の深まつてゆく風の音は身に沁みるものだな、と、慣れない独り寝に（源氏は秋の夜長を）明かすのもむずかしく感じておいでになつた明け方の霧が一面に立ちこめているところに、菊の花のはころびはじめた枝に、（喪中の源氏にふさわしい）濃い青色の紙を使った手紙を付けて、（だれか使いの者が）そつと置いて（返事も求めずに）立ち去つた。（それを源氏が）「折に相応しく（しゃれることをするものだ」と（思つ）て御覧になると、六条御息所の御筆蹟である。（その手紙に言うには）「（お悲しみを邪魔してはとお便りも）申しあげずにいたあいだ（私の気持ちのこと）はおわかりいただけますでしょうか。

人の世を……この世の中（は無常といいながら、奥方さまの悲報）をしみじみと悲しいことだと聞くにつけましても（菊も露にぬれるほどですからもちろん私も）涙がちにしておりますが、（まして愛する方をお亡くしになつて）取り残される（あなたさまの）袖（はどんなにか涙に濡れていらっしゃることかということ）をお察し申しあげます

ただただ今の空の風情に、（悲しみも私の）胸にはおさめきれなくて（ついお便り申しあげてしましました）と（書いて）ある。（それを見て源氏は）「いつもに増してすばらしくお書きになつたことだ」と、（葵の上の死を招くもとになつた人からの手紙だ）とはいってもやはり打ち捨ててはおけないよう御覧になるのではあるが、なんとも白々しいお悔やみだと嫌な気もする。しかしだからといつて、まったく無視して（お返事も）申しあげないとすると（それはさすがに）氣の毒で、六条御息所の御面目が立たなくなつてしまいそうだということをお考えになつて（返事をどうしようかと）決めあぐねておいでになる。亡くなつた葵の上は、いずれにせよ、そうなることが決まつていた宿命ではいらっしゃつたのだろうが、（自分は）どうしてまたあんな（恋人の生き靈が自分の妻に取り憑くなどという）ことをまさまさとはつきり見聞きしたのだろうかと（源氏にとって）後悔の念にさいなまれるのは、自分の気持ちとはい

えやはり（すでに心のはなれた六条御息所に対する）態度を改めることができにならないようだ。（六条御息所の息女である）斎宮の御潔斎にも差し障りがあるのではないかななどと、（源氏は）長いこと思い悩んでおいでになるが、わざわざ届けられた（お手紙への）お返事も申しあげないので情け知らずということにもなるうかと（思つ）て、紫の鈍色がかった紙に、「ずいぶん（という）ほど（御挨拶もいたさないまま）日が経つてしましましたが、（あなたさまのことを）粗略に存じてはおりませんものの、（こちらから御連絡を）控えているあいだのことは、（そちらのお手紙にもあったようにあなたさまのお気持ちが）そういうことなら（あなたさまもこちらの事情を）お察しくださいと（存じまし）て（御無沙汰いたしました）。

とまる身も……（この世に）残る者も（あの世へと姿が）消えた（者）も同様の露の（ようにはかない）世の中に、いつまでも執着するようなことは意味のないことだと存じております

（あなたさまのお気持ちに十分にはお応えできない私へのお恨みもあることでしょうが）一方では（あなたさまも私への執着の）気持ちをどうかお捨てくださいませ。（喪中の身からの手紙では）お読みいただけないと（も存じまし）て、こちらからも（ごく簡単な手紙で失礼いたします）と（源氏は六条御息所にお返事を）申しあげた。

解答

問1 みやすんどころ 問2 ア=5 イ=2 ウ=1 エ=1

問3 (1) // 咲きかけている〔7字・解答例〕 / 花開き始めている〔8字・別解例〕
(3) // どうにも白々しい〔8字・解答例〕 / 何とも空々しい〔7字・別解例〕
(5) // 遠慮していた〔6字・解答例〕 / 連絡を控えていた〔8字・別解例〕

問4 筆跡（筆蹟） 問5 (a)=1 (b)=1 (c)=3

問6 2 問7 4 問8 つれな～らひや（6行目） 問9 2

【問題】（自習）

出典：『建礼門院右京大夫集』／東洋大学・法学部 98年

現代語訳

翌年の春、（壇ノ浦の合戦で安徳天皇はじめ平家の人々が入水し、自分が思いを寄せていた平資盛さまが）本当にこの世のほか（の、あの世の人になった）と（聞きたくもなかつたことを）とうとう聞いてしまった。その（資盛さまが死んだという悲報の届いた）ころのことは、（それまでのつらさにくらべても）まして、何と言つたらよいだろうか（言葉にはできないほどの悲しみだつた）。（このような結果になるということは）みな前々から覚悟していたことではあるが、（現実にその知らせを聞いてみると）ひたすらつゝ茫然としてしまうばかりだ。あまり（のこと）にせきとめかねて流す涙も、一方では（側で）見る人にも（すこしは）隠さなければならぬいような気がするので、どうしたのかと人も思つてゐるのであろうが、気分が悪いと（言つ）て、（一日中、袴^{はま}「=掛布団として使う着物」を頭から）すっぽりとかぶつて寝て暮らしてばかり（いて）、（悲しみの）思いにまかせて泣き過ごす。どうにかしてその（資盛さまが死んだ）ことを忘れようと思うけれど、（かえつて）生憎にも（資盛さまの在りし日の）面影は我が身から離れず、（かつて聞いた）一言一言を（耳に）聞くような気がして、（我が）身をさいなむ悲しさは、残りなくすべてを言い表せるすべもない。ただ単に、「（あらかじめ）定まつている宿命として（自然と寿命が来て）亡く（なつた）」などと聞いた場合でさえ、悲しいことだと（世間では）言つたり思つたりするけれども、この（のような非業の死の）場合は何を類例にしたらしいのであるうかと、（他に比べようのないほどの悲しさを）繰り返し繰り返し思わずにはいられなくて、

なべて世の……一般に世の中の死ということを悲しいと（いうのは、このような夢（としか思われないつらい目）にあつたことのない人が言つたことだろうか

時がたつて（ある）人の所から、「それにしてもこの哀切きわまるることを、どれほど（あなたは悲しんでいらっしゃる」とでしょう）か」と言つてきたので、（まるつきり社交辞令のような）並ひととおりの挨拶のように感じられて、
かなしとも……言葉にできないほどつらいとも、また胸にこたえるとも、世間の並（の表現）で言い表すことができるのであれば
まだよいのですが（そんな程度の悲しみではあるはずがないことです）

こうして（深い悲しみに、後を追つて自分も死にたいと思って）いても、現実には（愛する人を失つた後も宿命によつて）生き続ける（このつらい）世の通例が（自分もそうかと思うと）情けなく、明けたり暮れたりし（て日を送つ）ているうちに、それでも正氣も少し戻つてきて、様々なことをあれこれと思い続けるにつれて、（冷静に自分を見つめる分だけ却つて）悲しさもやはりいよいよ強まる気がする。頼りなくしみじみといじらしかった男女の仲の様子も、私一人（だけ）のことではない。同じ（平家の）一族の人々に縁があつ（て契つてはかない目にあつ）た人は、知つている（人）も知らない（人）もやはり大勢にはなるのだが「『大勢いるのだが』、自分のことになると比べるものがないと思われるばかりだ。昔も今も、（老衰などの）普通に穏やかな宿命による（死の）別れはよくあることだけれど、このようにつらいことはいつあつただろうか（、これほどに悲しい別れはこれまでにはなかつたことだろう）とばかり思うのもそれはそれとして、ただあれこれと、やはり心になじんでいた（資盛さまの）ことばかりの忘れにくさは、なんとかどうにかしてもう忘れようと思つてばかりいるのに、（それが）できない（ことが）、悲しくて、

ためしなき……（世間に）他に比べるものもないこのような（悲しい死の）別れをして（おきながら）、それでもやはり（この世に）とどまる（愛しいあの人）の面影が（私の）身に寄り添うばかりで（あの人のこと忘れられないのが）つらく思われる

いかで今は……どうにかして今は（悲しんでも）無駄である（あの人死んだ）ことを悲しまず、何もかも忘れてしまう気持ちでいたいものなのに

忘れむと……忘れようと思つてもまた（すぐに）思い返して、（悲しみのもととなる、あの人思い出が）跡形もなくなるようなことは（、それもやはり）悲しいことだ（とも思つてしまふのだ）。

問1 ア=8 イ=6 ウ=9 エ=1 問2 3 問3 A=4 エ=2

問4 B=4 H=2 I=5 J=5 L=2 問5 a=(2) b=(5) c=(4)

問6 10 問7 3 問8 13 問9 4 問10 1・6 問11 6

解説

問1 ア まず、空欄直前「忘れ」が《下二段活用動詞の未然形》または《同・連用形》の形なので、空欄は《未然形接続》か《連用形接続》の語で始まる必要がある。さらに、空欄は下に《引用》の助詞「と」を伴うので文末扱いとなり、空欄を含む節の中の空欄より前に《疑問副詞》「いかで」があるので、空欄は係り結びによって連体形となつてゐるはずである。（係り結びは係助詞だけではなく疑問の連用修飾語によつても起ることに注意。）この条件に合致するのは1「ける」と8「む」である。ここからは文脈把握の問題となるが、このとき注意するのが、「いかで」の用法である。一般に、疑問副詞には《疑問》・《反語》・《詠嘆》の用法があるが、「いかで」および「いかでか」については、上記に加えて《願望》の用法もあるのだった。空欄前後では、「ものを忘れ」ることすなわち「なにもかも忘れてしまう」ことを話題にしている。「ける」では「どのようにして私はすべてをわすれてしまつたのだろうか」となるが、このあとも作者は苦しみ続けるのだからこれでは意味が通らない。「む」を使って「どのようにかして忘れよう」とすべきだ。

イ まず、空欄直前「思」が《ハ行四段活用動詞の語幹》なので、空欄は《ハ行四段活用動詞の活用語尾》からはじまるはずだ。これに合致するのは2「ふ」・3「へり」・6「へ」の三つ。さらに、空欄を含む節の中の空欄より前に係助詞「こそ」があるので、空欄は《已然形活用語尾》であることになつて、正解は「へ」。「こそ(已然形)」で文が終始しない場合は《逆接強調》の用法となるが、この点からも文脈に合致している。なお、空欄の後に読点「、」があるので《終止形》がはいることはないと考えた諸君がいるかも知れないが、それはそうとも言えない。本来古文には句読点はなく、出題者などの解釈によつて補われた形で出題されている。その際に、終止形の言い切りの形でも、いったん止める形にしておきながら意識の流れはなお続していくような場合は、句

点「。」を打たないことがある。

ウ まず、空欄の直前が《係助詞》なので、空欄は文節の頭となつて《自立語》で始まる必要がある。さらに、空欄のあとで読點からそこで意味がいつたん切れることがわかるので、係助詞「こそ」との係り結びによつて空欄の最後は《已然形》である必要がある。この両方を満たすのは、《ラ行変格活用動詞已然形》の9「あれ」のみ。

エ まず、空欄の直前が《ラ行変格活用動詞の連用形》なので（ラ変動詞終止形には助動詞は接続しない）、空欄は《連用形接続》の語である必要がある。さらに、空欄は下に《引用》の助詞「と」を伴うので文末扱いとなり、空欄を含む節の中の空欄より前に《係助詞》「かは」があるので、空欄は連体形で終わつてゐるはずである。以上を満たすのは1「ける」のみ。

なお、3「へり」は、《ハ行四段活用動詞の已然形活用語尾》+《存続の助動詞「り」》の形になつてゐる。問題文に「語を選べ」とあるので、これは一語にまたがつて不適切だと考へることもできそうだ。しかし、大学入試においては「語」と言ふ言葉がつねに「单語」を示すとは限らないので、これもきちんと正解となる可能性を考えておくのは大切なことだ。

問2

設問文に言う「通常の語法としては安定しない」というのは何のことか。一般に、形容詞の《本活用連用形》のあとに《係助詞》がくると、そのあとには《あり》系の補助動詞》（「あり」・「はべり」・「さぶらふ」・「おはす」・「おはします」など）がくることが多い。たとえば、「うつくし」を係り結びで強調するときに「うつくしそある」・「うつくしくなむはべる」といった具合である。またこれとは別に、形容詞「多し」については、活用に特色があることにも注意しておこう。一般に、形容詞の活用は「〇・く・し・き・けれ・〇」の《本活用》と「から・かり・〇・かる・〇・かれ」の《補助活用》とで構成され、《補助活用》列は主として助動詞を接続するために用いるのだった。しかし「多し」に関しては《補助活用》列が《本活用》的に用いられることが普通で、そのため終止形「多かり」や已然形「多かれ」が存在してこちらの方がよく用いられるという特色がある。そしてこの「多かり」は、「多くあり」の熟合したものと考えられるものである。

なお、活用の仕方が通常とは異なる形容詞としては、もう一つ「同じ」がある。これは、《本活用》列の《終止形》と《連用形》が同形となる点が他の形容詞とは異なつてゐる。設問で「活用の仕方が普通でない形容詞を問題文中から抜き出せ」などとあれば「多かり」か「同じ」を探せ」と言つてゐるようなものだ。二語とも古語辞典を引いて確認しておくとよい。

問3 A 「又の」は通常「他の・別の」の意味だが、時間単位に関係する名詞（「年」・「月」・「日」など）と連語になると「次の・翌・明くる」といった意味になる。

E 形容動詞「あやにくなり」は漢字では「生憎なり」と表記され、これでわかるように現代語の「あいにくだ」の直接の祖先である。「自分の期待とはうらはらに悪い結果がもたらされたときの落胆・困惑の心情」のように理解しておくとよい。

問4 B 《係助詞》「や・か」はどちらも《疑問》・《反語》の両方を表しうるが、これが「やは・かは」となると普通は《反語》の用法となる。「なにとかはいはむ」は「なにといはむ」の反語だから、「言ふ」の否定文となるはずだ。選択肢1・2は肯定文的願望表現となつて不適。3は疑問文型中に準体助詞「の」がはいるとふつうは《疑問》意に固定される（＝《反語》文には聞こえにくい）ので不適。5は疑問語の訳に相当する部分が「どうしたら」となつており、これは「いかに」などの語で示されるべきことだから不適。

H 《助動詞》「つ・ぬ」が類義・対義語に統けて重ねて用いられている場合、これは（《完了》や《確述》でなく）《並列》の用法となる。現代語の「たり」（たとえば類義「踏んだり蹴つたり」・対義「行つたり来たり」など）に相当する。

I 原文の「契り」の訳語に相当する選択肢末尾だけで、1・3の「年月」は排除できる。また「あはれなり」は「しみじみと胸を打つような心情一般」を言うのだから、4の「つまらなかつた」も遠い。残る2・5については、続く傍線部J「おなじゆかりの夢見る人」以下と連動させて考える。あとで見るようにこれは「平家の君達と恋仲だった女性たち」のことを言うので、5が正解となる。

J 「ゆかり」は「血縁・姻戚関係によるつながり（のある人）」の意味だから、これで1を排除する。また、続く「さしあたりて」が古文では「自分のこととして現実化すると」の意味で用いられることに鑑みれば、傍線部の「おなじ」は「自分と同じよう」の意味を持つことになる。作者は平資盛と恋仲にあつたが、平家一門の滅亡のために恋人を失つた身の上である。これで3・4のような肯定的な内容の選択肢を捨てる。また2では被修飾語が「あの人」となつており、特定の人物を問題にしていることになるが、それでは傍線部K「多くこそなれど」に結びつかない。よつて正解は5。

L 《疑問副詞》「いかで」の用法上の注意点は、問1-Aで見たとおり。この語はもともと「いかにて」の熟合したものだから、「如何」の意味合いから考えると（《原因・理由》に対する疑問ではなく）《方法・手段・様態》に対する疑問が根柢にある。したがつ

て「なぜ」としている選択肢1・3が消える。残る選択肢の違いは2『願望』・4『反語』・5『疑問』という意識の違いとなる。これは文脈で確認するしかない。これについては、傍線部に統いて「～とのみ思へど、かなはぬ（コトガ）、悲しくて」とあるので、傍線部は「期待」を含めた表現だと考えて、2『願望』を探る。

問5 和歌の解釈においては、次の三点を大切にするとよい。すなわち、

① まず『詞書』（＝和歌に至る地の文）の内容から、和歌に込められた感情を推定する。

② 次に『句切れ』（＝文法的には述語にある）の部分を和歌の中心と見て、構文にしたがって解釈する。

③ その際に、『修辞』（とくに『掛詞』）に注意が使われていないか確認する。

右の①について先に見ておこう。(1)の歌では、直前に「これは、なにをかためしにせむと、かへすがへすおぼえて」とあり、指示語「これ」の指示対象を考えると、「恋人を戦で失った、他に比べようもない悲しみ」程度となる。(2)では、直前に「人のもとより、『そもそもこのあはれ、いかばかりか』といひたれば、なべてのことのやうにおぼえて」とあるので、「他者の慰めが等閑なもに感じられる心境」程度。(3)から(5)までは共通で、直前に「いかでいかで今は忘れむとのみ思へど、かなはぬ、かなしくて」とあるので、「恋人を失った悲しみを忘れてしまいたいが忘れられようもない辛さ」程度となる。

また右の②については、それぞれの歌の『句切れ』＝『述語』を中心に抜き出すと、

- (1) かかる夢みぬ人やいひけむ……こんな目にあわない人が言つたのだろうか
- (2) 世のつねにいふべきことにあらばこそあらめ……並一通りに言えることならよいのだが
- (3) 身にそふぞ憂き……我が身から離れないのが辛い
- (4) 物忘れする心にもがな……何もかも忘れてしまえるといいのに
- (5) 名残りながらむことぞかなしき……跡形もなく消えるのは悲しいなどとなる。これらを念頭に置いて考えよう。

a 設問に「怒りにも似た感情」とあるが、右に見たように、「悲しみ・辛さ」が直接の表現内容となっていないのは(2)だけである。『述語』にふくまれる「あらばこそあらめ」の係り結びは『逆接』のニュアンスを含んだ『適当』「～すればよいが・～ならばよいが」の表現で、『詞書き』と『述語』をあわせて考えると、実のない慰めにやり場のないつらさを八つ当たりして皮肉を言つ

でいるような調子である。

b 設問の「矛盾を含んだ複雑な心情」に鑑みて、和歌の《述語》部分に表された感情と相反する内容を含む歌を探せばよい。

(5)の歌の「忘れむと思ひても」がそれにあたり、《述語》部分との橋渡しの「またたちかへり」が「反対に」のニュアンスを担つて いる。

c (1) = 「や……けむ」、(2) = 「こそ……め」、(3) = 「ぞ・憂き」、(5) = 「ぞ・かなしき」がそれぞれ《係り結び》になつて いる。よつて(4)を探る。

問6 問題となつた「ほれぼれと」は、漢字では「惚れ惚れと」と表記され、「恍惚」状態をいう。現代語では「讚歎」のような肯定

的なニュアンスを含んでうつとりしている様子を言うが、もともとは「放心」などのぼんやりした状態を言った。現代語にも「老いぼれ」の「ぼれ」に残つて いる。これと「対照的な意味で用いられている」というのだから、「意識がはつきりしている状態」を示す語を探すことになり、またとくに設問文で「名詞」と指定されているのも大きなヒントになる。(ここでは10行目の「うつし心」がそれで、漢字では「現し心」と書き、「現実的で冷静な意識」を意味する。「夢」の対義語の「現」を知つていれば容易に正解にたどりつけただろう。)

問7 傍線部が《已然形 + 「ば」》で《順接確定条件》の形になつており、《原因理由》を示して いると考えられるので、その結果としても つとも適切なものを選ぶことになる。

ここで注意すべきことが一つある。形容詞「つまし」は動詞「つむ」と派生関係にある語で、「なにかを包み隠したいような気持ち」を言い、現代語の「慎ましい」とは微妙にニュアンスを異にするということだ。(右の意味が「気が引けて遠慮がちに感じる気持ち」を経て現代語の「遠慮深い様子」に移つたと考えるとわかりやすいだろう。)

さて、傍線部自体の意味は、逐語訳的には「(私の様子を見る人も遠慮がちなので」などとしてしまいかだが、実はそうではない。傍線部の直後に「なにとか人も思ふらめど」とあり、他者を主語とした表現はこの部分であつて、「他者から自分への詮索の視線」が表現されている。これは傍線部の「包み隠したい気持ち」とは反対の心理状態の現れだから、前の段落で確認したことを合わせると、傍線部は「私を見る人の目も気になつたから」といった意味で自分自身の心情を表現した言葉だということにな

る。「あまりの悲嘆を他人に見せたくない」といった心情が『原因理由』なのだから、その『帰結』となる行為としては、3 「(寝具を) 引きかぶって (一日中) 寝て暮らす」を選ぶのが妥当である。

問8

設問に「ほぼ同じ意味」とあるので、まずは傍線部に含まれる語と同じ語として「限り」・「命」・「はかなく」などを含む表現を拾つてゆくという手が考えられるが、これだけではやはり漠然としすぎている。なんらかのもう少し明確な目当てを得られないだろうか。

「かぎりある命」とは「限界のある寿命」の意味だが、古人が寿命・生命を話題にするときは、その発想の根本に「仏道」があることを忘れてはならない。仏道の教えに依れば、「寿命には限界がある」というのは、「人の一生はもともと定まっている」といつた意味合いを含むことになり、したがつて「かぎりある命にはかなく(なる)」というのは、「生まれる前から定まっていた宿命によつて死を迎える」という意味になる。ここで、この文中で作者の意識の対象の中心にあるのは「恋人・平賀盛の、平家一門の滅亡に殉じた死」である。これも宿命といえばそうなのだろうが、平家の嫡流として栄華を極めていた恋人が合戦によつて命を落としたと聞いたときの作者には、これを宿命と割り切つて受け入れることはできなかつた。つまり、資盛の死は作者にとつてはまさに「非業の死」と感ぜられたわけだ。したがつて、「生まれる前から定まっていた宿命によつて死を迎える」というのは、「非業の死」とは対照的な「宿命からすれば順当な死」だということになる。このことも考えに入れながらその同義表現を探すことが、目當てとなるだろう。すると、これに相当するのが13行目の「のどかなる限りある別れ」である。「限り」の語も傍線部と共に通ずることを、確認材料とすることができる。

問9

問1イで見たとおり、傍線部の前は逆接表現となつてゐるので、傍線部の指示語は直前ではなく、そのもう一つ前に述べられたことを指すと考へるべきだ。すなわち、傍線部の前の逆接される部分は「ただかぎりある命にて~いひ思へ」でひとまとまりになつてゐるので、その前の「あやにくに面影は身にそひ、言の葉ごとに聞く心ちして、身をせめてかなしきこと、いひ尽すべきかたなし」を指すものと考へる。これは、端的に言へば「恋人・平賀盛の死」を意味する。

1 「聞きしこと」(5行目)は、傍線部直前の逆接部に含まれるので、指示対象ではない。2 「なべてのこと」(8行目)は、「世間一般にありがちなこと」だから不適。3 「いふべきこと」(9行目)も、直前に「世のつねに」とあって2と同様に不適。4 「か

く憂きこと」（13行目）は、「世間一般の死ならまだしも、こんなに辛いことはない」という表現の展開のパターンが傍線部の前後と共通する。5「思ひなれにしこと」（14行目）は「資盛との思い出」の意味で紛らわしいが、これは資盛の生前のことだから、悲報に接した悲しみとは別物である。

- 問10 1 文章全体が「悲嘆」に満ちており、これまでも見てきたように、文章中に何ヶ所もだれかの死の報せに接したための悲嘆であることが述べられている。ただし、これは「恋人」に限ったことではなく、「大切な人」ならだれでもよさそうである。これが「恋人を失つてしまつた」ことに由来するものであると積極的に判断する材料は、実は文学史の知識による。大学入試においては、『建礼門院右京大夫集』がそうした作品であることは古典文学史上的常識である。
- 2 「親」が不適。右に述べたように、問題文中には「親」と「恋人」のどちらなのかが判断できる部分はない。文学史の知識による判断が要求されている。

- 3 「やりとり」が不適。問題文中には贈答歌は見られない。
- 4 「深さ」が不適。むしろ、世間の人からの同情心については8行目に「なべてのことのやうにおぼえて」とある。
- 5 「物語」が不適。題名からもわかるように、この作品は「私家集」なのだが、その『詞書き』が大変に詳しいので、実質的には「日記」として読まれている。
- 6 右に見たとおりで、この選択肢が5と対比すべき内容になり、妥当である。

問11

『建礼門院右京大夫集』の作者は、「建礼門院平徳子（清盛の娘・高倉天皇中宮・安徳天皇の生母）」に仕えて「右京大夫」と呼ばれた女房で、歌人としての才能を高く評価されていた。作者自身は藤原氏だが、当時全盛を誇った平家の出身である中宮に女房として仕えたために、平家の公達と交際するうちに、清盛の孫・資盛と恋に落ち、資盛の死によつて悲しみを極めた後、出家を考えたが状況が許さず、後鳥羽上皇の時代まで宫廷に仕えた。……といったことがわかるのも、この作品が私家集でありながら事実上の日記文学だからである。問10の選択肢1・5の解説も参照のこと。

右のことから、選択肢としては6「平家物語」と7「新古今和歌集」との妥当性を比較することになる。6は平家一門の栄華と滅亡に焦点をあてた作品で、まさに作者の人生と重なる。7にも作者の歌は採られているが、それはあくまでも当時を代表する歌

人たちのひとりとしてのことである。『建礼門院右京大夫集』の内容、ともつとも関係の深いもの」と言われば、『平家物語』を採らざるをえない。

L3M
早大国語



会員番号	
------	--

氏名	
----	--